

# 2014年度自己点検・評価報告書(シート)

## 【目標の進捗状況(達成度)評価・報告】(最終年度)

### 《大学》

担当(記述)部局は、 ☆印の箇所を記入してください。

#### I. 評価項目・要素と担当部局

本報告書(シート)の自己点検・評価項目・要素と担当部局は次のとおりである。

対象部局	総合政策研究科
大項目	4 教育研究組織 (研究科)
中項目	
小項目	4.0.1 大学の学部・学科・研究科・専攻および附置研究所・センター等の教育研究組織は、理念・目的に照らして適切なものであるか。
要素	教育研究組織の編制原理 理念・目的との適合性 学術の進展や社会の要請との適合性 (KG1)研究活動の状況
小項目	4.0.2 教育研究組織の適切性について、定期的に検証を行っているか。
要素	

#### II. 目標の進捗状況(達成度)評価と報告【2014.4.30現在】

##### 《進捗状況(達成度)評価》

本項目において、2009年度～2013年度の中期的な「目標」と「指標」を次のとおり設定し、毎年度進捗状況(達成度)の自己評価を行っている。進捗状況(達成度)評価は、目標の2014年4月30日現在における進捗状況(達成度)の評価(2013年度1年間の活動評価ではなく、2014年4月30日現在で目標がどこまで進んだかの評価)であり、A、B、C、Dの4段階で行ったものである。A、B、C、D評価の基準は目安として次のようなものである。

- A : 目標実現のための計画や方策などを適切に実行し、目標を達成している。もしくはほぼ達成している。  
 B : 目標実現のための計画や方策などを概ね適切に実行しているが、まだ目標は達成していない。  
 C : 目標実現のための計画や方策などを実行しているが十分ではなく、目標は達成していない。達成にはまだしばらく時間がかかる。  
 D : 目標実現のための計画や方策などを実行していない。当然目標は達成していない。

2009年度に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗状況(達成度)評価				
		2009	2010	2011	2012	2013
1. 適切な特定プロジェクトセンターの立ち上げ及び見直しにより共同研究を推進する	→特定プロジェクトセンター立ち上げ・見直し状況	B	B	B	B	B
2. 研究会の開催によって教員の研究分野の相互理解を増進する	→研究会開催回数	B	B	B	B	B
3. 2010年度よりドーナツアワー(院生と教員のコミュニケーションをはかる場)の開催等を通して院生と教員の間での開かれた関係を構築する	→ドーナツアワー開催回数	A	A	A	A	A
		☆				
2010年度以降に設定した「目標」	左記目標の「指標」	2009	2010	2011	2012	2013
	→					
	→					

##### 《進捗状況(達成度)報告》 担当(記述)部局は「指標」に基づいた報告をしてください。

上記で自己評価した目標の進捗状況(達成度)について、次のとおり説明・報告する。

目標1	B	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 特定プロジェクト研究センターの活動は基本的に、主催する教員にまかされており、学部・研究科では資金面等の支援に努めている。各センターでは、教員間の共同研究の促進とともに、大学院生等の参加によって大学院教育にも資することが期待されている。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 2014年4月に活動している特定プロジェクト研究センターは6つであるが(リスク・デザイン、グローバル・ポリシー、ヒューマン・エコロジー、西アフリカ電波利用促進国際協力、サイエンス映像、地域・まち・環境総合研究)、それぞれに活発な研究活動を展開している。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 今後、より広い視点で共通の問題点をテーマに、研究科がプロジェクトをプロモートすることも考えられる。現在はプロモーションのための組織は未整備だが、新たな研究の展開をめざして枠組み作りを始める時期に来ていると思われる。	☆
		その他	
			☆

目標2	B	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 学部研究会運営委員会が、各教員からの申請等にもとづき、特別講演会・学部講演会・新任教員研究発表会等を企画・運営している。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 大学院では、とくに産官学民の共同研究体制として設立されたリサーチ・コンソーシアムが、外部からの講師を招いて、講演ならびにシンポジウムを開催している。同時に、各種の講演会も計画しているが、ここ数年、活動がやや低迷しているため、研究科による積極的なプロモーションが必要かと思われる。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 2014年度以降は、これらの各種研究会をさらにプロモートすることで、異分野の教員間の共同研究を推進していく予定である。	☆
		その他	
			☆
目標3	A	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 大学院FD・カリキュラム委員会等がドーナツアワーの運営を担当、異分野の教員・大学院生間の研究成果の共有化をはかっている。基本的な目標は、研究科内の議論を活性化させ、学会等での研究成果の発表につなげていくことである。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 2013年度は、計7回のドーナツアワーを開催、研究科内の議論を活性化させることができた。一方で、大学院生の参加率は必ずしも高くないため、内容や形式について一層の工夫が必要と思われる。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 2016年に予定されている大学院カリキュラム改訂では、ドーナツアワーを発展させ、多分野の教員・大学院生による共同研究の場としてのリサーチ・プロジェクトへの発展を計画している。	☆
		その他	☆
備考		現在、2016年度に予定している大学院の定員削減ならびにカリキュラム改訂にあわせて、各種の制度を整備して、大学院教育ならびに研究活動の推進を計画している。	☆